

近世前期の世話浄瑠璃における 自称代名詞についての研究

—町人言葉を中心として—

関 丞 希*

目 次

- I. 序 論
 - II. 本 論
 - 1. 「ます体」と呼応する自称代名詞の用法及び待遇価値
 - 1-1. 「敬語+ます体」と呼応するもの
 - 1-2. 「通常語+ます体」と呼応するもの
 - 2. 「ちや体」と呼応する自称代名詞の用法と待遇価値
 - 2-1. 「敬語+ちや体」と呼応するもの
 - 2-2. 「通常語+ちや体」と呼応するもの
 - III. 結 論
-

I. 序 論

1. 研究対象及び意義

待遇表現¹⁾を研究する一方法として、近世に使われた人称代名詞の用法と待遇価値について考察しようとする。日本語の代名詞は本来、敬語と深い関係を持っており、中でも近世の人称代名詞は現代に比べ、その種類もはるかに多いゆえ、近世の自称・対称代名詞の研究はその時代の待遇表現の研究において重要な位置を占めると思う。

時代区分は近世を徳川家康が江戸に幕府を開いた時から明治維新までとし、宝暦を境として近世を前期・後期に分ける一般説に従うことにする。

近世語の代表的特徴として、口語と文語の対立、上方語と江戸語との対立、階級間言語

* 韓國外大 講師 일본어학

1) 待遇表現とは言語表現を行うに当たり、表現主体が自分自身・表現の相手・話題人物のそれぞれの間に、上下親疎など、どのような関係があるかを認定し、それを表現形式の上に反映させること、また、其の表現である。(佐藤喜代治編、『國語學研究辭典』、明治書院、1983、p.195)

の対立などがあげられる。そのような近世語の対立を考慮しながら、本稿では口語の実態を研究の対象としている。近世に自らの文化を形成して積極的に社會に登場した町人の言葉を主な考察の対象とした。町人とは狭義には家持ちの町の住民をさすが、廣義には店借り・地借りをも含む²⁾。本稿では廣義の町人の意味をとることにする。

近世前期上方語と後期江戸語の自称・對称代名詞を分析し、その変遷までを探って見ることが筆者の最終目標であるが、本稿ではその事前段階として前期上方の自称代名詞の用法および待遇価値を考察しようとする。このような考察は近世語の待遇表現研究にもおいて意義ある作業であろう。

2. 研究方法及び資料

本稿の考察対象は現代語ではなく、近世前期上方の文學作品に現われた言語現象である。過去一定した時期の言語現象を明らかにする方法として、まず、近世前期の文學作品にあらわれた自称代名詞を取り出し、それらがどのような文末表現と呼応を成しているのかによって分けてみた。すなわち、文末表現を「敬語＋ます体」「通常語＋ます体」「敬語＋ちや体」「通常語＋ちや体」のように細分化させ、それぞれと呼応している自称代名詞を分類し、待遇価値や用法を明確にしようとして試みた。

近世の言語の研究は、抄物・仮名草子・浮世草子・狂言・キリストン資料・浄瑠璃・洒落本・滑稽本・人情本などの資料に基づく。しかし、近世のどの時期の言語に焦点をおくかによって、考察されるべき資料は異なる。また、口語が反映されている文獻資料か、文語が反映されている文獻資料かなど文獻資料の性格も様々である。従って、一口に近世語の研究と言っても、考察対象や目的をどのように捉えるかによって選擇すべき資料は様々であり、近世文獻資料の選擇においては慎重でなければならない。

筆者は資料としては近松³⁾の世話浄瑠璃を扱っており、文獻資料の選擇は次のような理由に基づく。

- ①近松の世話浄瑠璃は近世前期の言葉が表れている文學作品で、その時代の生き生きした言葉が觀察できる代表的な作品である。
- ②近松の世話浄瑠璃の中に町人が多く登場し、その時代の町人言葉がもっともよく考察できる。また、待遇表現研究においては必須不可欠である多様な人間關係が描かれている。
- ③話し言葉を考察の対象としているゆえ、文語的要素が濃くかつ文語と口語との區別が困難な作品は避け、話し言葉の考察が比較的容易な作品を選んだ。
- ④前期の作品は上方語が室町時代の言語の影響から完全に脱して成立し、發達した元祿時代(1688—1703)以降の作品である。

2) 松村明編、『大辭林』、三省堂、1990年、p.1574

3) 今後、近松の作品だけではなく、他の作品も調査していくことにする。

3. 先行研究

本稿の研究対象は前期上方の自称代名詞であるが、待遇表現という大きなカテゴリーの中で、特に人称代名詞についての先行研究を中心に察してみることにする。近世前期上方の人称代名詞についての研究としては、湯澤幸吉郎氏の『徳川時代語の研究』、坂梨隆三氏の『江戸時代語の國語－上方語－』、山崎久之氏の『國語待遇表現体系の研究』などがあげられる。『徳川時代語の研究』で湯澤幸吉郎氏は、体言を人代名詞と提示代名詞に分け、近世に如何なる代名詞が用いられたかについて述べている。

次に近世後期江戸の人称代名詞については『江戸時代語の國語－上方語－』で坂梨隆三氏は、近世の音韻・文字・表記・文法・敬語など幅広く近世語の全般にわたって論じている。その中、人称代名詞についての研究をみると、敬語の項で「お前」「こなた」「貴様」「わたくし」「わし」について例をあげながら詳しく論じている。人称を敬語（主に述語）との関係で取り扱いながら、各人称代名詞の待遇価値について言及し、待遇表現研究史において重要な位置を占めている。また、具体的な状況説明がされているので、提示された近世人称代名詞の語法及び待遇価値把握も容易である。しかし、特定な人称代名詞だけを取り立てて扱い、近世の人称代名詞体系という全体の中で各代名詞を位置付けることにおいては、難しさが残っている。また、頻度数が少ないとは言え、使用例の少ない人称代名詞についての研究も必要であるが、考察の対象が特定の人称代名詞に限っている。

田中章夫⁴⁾氏は次のように江戸の代名詞を3分類している。

<江戸語>

* 最も敬意の高い場合の言い方

自称代名詞：わたくし

対称代名詞：あなた・おまえさん、きでん

* 普通の敬語表現にみられる言い方

自称代名詞：わたし、わっち

対称代名詞：おまえ・おぬし・きさま・きこう・こなた・おまはん・おめえさん

* ごく軽い敬意のある場合の言い方

自称代名詞：わし、おれ、おら、わたし、わっち

対称代名詞：おめえ・おのし・てめえ

このように田中章夫の分類は簡単で、語法説明や待遇価値の把握においては、それほど分析的ではないが、江戸の代名詞研究だけではなく、下のように上方の代名詞についての研究も併用している点は高く評価すべきであろう。

4) 田中章夫、「近世敬語の概観」『敬語講座4.近世の敬語』、明治書院、1973. p.10-19

<上方語>

* 最も敬意の高い場合の言い方

自称代名詞：わたくし、わたし、拙者

対称代名詞：おまえ・おまえさま・こなたさま・こなさま・ごじぶんさま・きさま・おぬしさま・そもじさま

* 普通の敬語表現にみられる言い方

自称代名詞：わたし、おれ、み・みども、われわれ、こち・こちと、拙者、それがし

対称代名詞：こなた・そなた・きさま・ごじぶん・きでん・きこう・こなさん・こなさあ・おんみ・こなた

* ごく軽い敬意のある場合の言い方

自称代名詞：わし、おれ、み、われ、わ

対称代名詞：おぬし・わごりよ・わがみ・おてまえ・こなん・そなた・おみ

江戸語と上方語の相関関係にまでは言及していないが、前・後期の代名詞の差を認識することにおいて、役にたつ資料である。上方語と江戸語を別々に研究し、その二つの言語体系の関連性にはあまり触れない従来の研究傾向から脱し、これからの研究方向を提示している貴重な論文だと思う。もちろん、従来の研究においても、「きさま」や「あなた」など特定の人称代名詞についての通時的な研究が行われたのは言うまでもない。しかし、そのような個別的な人称代名詞の研究ではなく、人称代名詞という全体的なカテゴリーの中で、もっと広い範囲を考察対象にする通時的研究が行われるべきであると思う。そのような研究の上、個々の人称代名詞の待遇価値や語法や人称代名詞相互の関わりなども明確になろう。

これからの研究は上方語と江戸語との相違点・共通点、または変化・流れに注目する必要がある、本論文はそのような研究の必要性から出発して、まず近世前期の自称代名詞を考察し、続いて後期の自称代名詞をも検討するつもりである。その後、前・後期の自称代名詞の流れを検討する計画であり、本稿はその出発点にあると言える。

II. 本論

近世前期の作品である世話浄瑠璃には、どのような自称代名詞が使用されていたか、其々の自称代名詞はどのような用法や待遇価値を持っていたかなどを、例をあげながら調べることにする。研究方法で言及した通り、文末表現を四段階である「敬語+ます体」「通常語+ます体」「敬語+ちや体」「通常語+ちや体」に分け、それぞれの文末表現と呼応する

自称代名詞を取り上げ、具体的な用法まで探ることにした。

1. 「ます体」と呼応する自称代名詞の用法及び待遇価値⁵⁾

1-1. 「敬語+ます体」と呼応するもの

【 わたくし⁶⁾ 】 【 わたし 】 【 われら 】

「敬語+ます体」と呼応している自称代名詞としては「わたくし」「わたし」「われら」があった。「わたくし」「わたし」「われら」は近世前期上方で話し相手に對してもっとも高い敬意をあらわす自称代名詞であったと言える。この根據として、まず、「敬語+ます体」と呼応していること、もっとも敬意度の高い對称代名詞「おまへ」や「一さま」という呼称と一緒に用いられたことがあげられる。次に身分差がある人（[例1]）や心理的に隔たりがある目上の人に對して「わたくし」「わたし」「われら」が使われていた共通点も根據としてあげられる。このように堅苦しい、もっとも高い待遇価値を最上位待遇表現と呼ぶことにする。これら最上位待遇価値を表す自称代名詞はその高い敬意度のせいで、「通常語+ぢや体」といっしょに使われる用例は一つもなかった。

注目を引くのは自称代名詞「わたくし」「わたし」が二つとも最上位待遇表現であると言っても、同じ場で同じ話し手によってこれらの代名詞が混用されている用例は見つかられない。言い換えれば、文末表現「敬語+ます体」と呼応しながら待遇価値はあるほど同様であったが、その用法において「わたくし」「わたし」の間に明確な区分があったとも言える。

[例1] わたくしはおしま様より、……この文進せてくだされませ⁷⁾。

＜かごのもの → 大百姓の娘＞ (二⁸⁾、172)

まず、「わたくし」は身分が「町人→武士」のように身分的に明確な差がある場合とか、「下人→お主」のように主従関係の場合（[例1]）によく使われる傾向があった。もちろん、「わたくし」は男女区別なく使われた。

これに對して「わたし」は主に女性の使用例が多い。「わたし」を用例をみると、話し手が女性の場合に比べ、男性の場合は約10%くらいしか占めていない。用例数からいうと總用

5) 待遇価値とは敬意の度合いである。（辻村敏樹、『敬語論考』明治書院、1992、p.35）

6) 「私」にルビ（わたくし）が付いていないのは、その讀みの曖昧さのため、用例には含まなかった。

7) 以下の例文において、自称代名詞には のように、その自称代名詞とともに話し手が使用されている對称代名詞・固有名詞・身分・親族名詞などのその他の呼称・呼応を成している文末表現には のように表記し、見易く示すことにする。

8) 例文の出典は、略称で示し、出典の後の数字は、引用文の出る頁である。例文の話し手と相手との關係を明記しており、町人男性の場合は特に書かなくて、それ以外の場合は性別や所屬を示すことにする。

例457例の中、男性の使用例は43例であった。また、「わたし」の場合、主従関係の場合においても、文末表現「敬語+ます体」と呼応した用例は7例しかなく、ほとんど「通常語+ます体」と呼応を成していた。すなわち、「わたし」は最上位待遇表現としての用法を備えているが、当時、それが「わたし」の主な用法ではないことが指摘できる。

「わたし」とは逆に「われら」は話し手が男性の場合がはるかに多いのが目立つ。女性の用例は41例（総用例数363例）に止まっている。「わたし」と「われら」の性別による使用比率は次のようにまとめられる。

- ・「わたし」： 主に女性が使用。男性使用比率は約10%
(総用例 457例の中、男性使用例は43例)
- ・「われら」： 主に男性が使用。女性使用比率は約12%
(総用例 363例の中、女性使用例は41例)

次の用例（[例2]）は話し手が男性である「われら」の用例で、「町人→武士」という身分的な差があり、話し手（町人）は話し相手（侍）に対して自称代名詞「われら」をもって自分を称している。

[例2]お好みの汁三菜、我らが手際できりきりしやんと切立て、焼立て、塩梅よしの御機嫌よき……
<半兵衛（町人、八百屋） → 坂部郷差衛門（侍9）>（宵、579）

また、「わたくし」と「わたし」との共用例が見つからないことは対照的に、下の[例3]のように「わたくし」と「われら」との共用例は多数ある。しかし、「敬語+ます体」ともっとも多く呼応を成している自称代名詞はやはり「わたくし」であり、近世前期上方でもっとも高い敬意を表す自称代名詞が「わたくし」であったのは言うまでもない。

[例3]渡り奉公した御蔭、我らしだいに遊ばせ、わたくしお家にみぬばかり、なんの氣遣ひないこと……。
<源五兵衛（下人（元々は侍）） → 侍とその妻>（薩、111）

1-2。「通常語+ます体」と呼応するもの

【わたくし】 【わたし】 【われら】 【わし】

9) 話し相手が武士である場合は考察対象に含め、話し手が武士である場合は考察対象に含められていない。つまり、武士語として認識された自称代名詞については本稿では言及しない。

「わたくし」「わたし」「われら」は上で言及した通り、最上位待遇表現としても使われたが、「通常語+ます体」とも呼応して上位待遇表現¹⁰⁾としても使われていた。「わたくし」「わたし」「われら」と「わし」は礼を失わない範囲のくつろいだ敬意を表し、身分差のない、對等に近い目上の人にも用いられたという共通点があった。

文末表現との呼応を察してみた結果、上で言及した通り、「敬語+ます体」と「わたくし」「わたし」が共用される用例は見つからなかったが、文末表現「通常語+ます体」においては「わたくし」「わたし」の共用されている用例が容易く発見された。その上、【例6】は「わたくし」「わたし」「われら」が同じ場で同じ話し手によって特別な条件なしに共用されている珍しい用例であり、それら三つの自称代名詞が上位待遇価値を表し、当時、同様な待遇価値（上位）として人々に認識されたというのを証明してくれる重要な用例だとも思う。

【例4】申し、おなつ様、いつぞやお前に借りました七十兩の小半のこと、わたしが使う金にて……、傍輩の勘十郎、わたくし商ひに損をして、ひらに頼むと申した故、取替やらんと存ぜしが、……もういらぬ金子なれば、戻ませう。

<清十郎（但馬屋の手代）→ お夏（但馬屋主人の娘）> （五、291）

【例5】その上にてわたくしが、物の見事に去状書いて暇やります。……お前を慈悲ぢやと言はせたい、十六年以來、たった一度の御訴訟、老小不定の世の中、たとへわたしが先立つても、いかなる後の問ひ弔ひ、……この御訴訟は申しませぬ。

<半兵衛（店持ち町人の息子）→ 母> （宵、610）

【例6】我らは旅の者。わたしが舅の親仁様、ちやうどお前の年配で、恰好もそのまゝ……外へする奉公とはさらさらもつて思はれず、お年寄つた舅御の臥惱みの抱きかゝへ、宮仕へは嫁の役、御用に立てばわたくしも形見に……。

<梅川（嫁）→ 勝木孫右衛門（舅、初對面）> （冥、66-67）

上位待遇価値を表す自称代名詞の中、「わし」だけは「敬語+ます体」と呼応する用例が見つからなかったことや、「わし」は「ます体」と呼応する用例より「ぢや体」と呼応する用例が遙かに多いことから、当時、「わたくし」「わたし」「われら」に比べて「わし」の待遇価値が低かったと言える。また、「わし」は女性によって盛んに用いられた語で総用例数は542例に至るが、男性の使用例は2例しかない。女性の中で、特に遊女¹¹⁾の使用用例が圧倒的に多

10) 上位待遇表現とは、礼を失わない範囲のくつろいだ敬意を表す表現をいう。身分差のない、對等に近い目上の人に用いられる。

11) 遊女言葉は考察対象ではないので詳しく言及しない。また、遊女の使用した自称代名詞「わちき」についても本稿の考察対象から脱しているの言及しない。

い特徴を見せていた。

2. 「ぢや体」と呼応する自称代名詞の用法と待遇価値

2-1. 「敬語+ぢや体」と呼応するもの

【われら】 【わたし】 【わし】

「敬語+ぢや体」と呼応する自称代名詞としては「われら」「わたし」「わし」があった。「ます体」と呼応した自称代名詞の中、「わたくし」だけが抜けられている。つまり、「わたくし」「わたし」「われら」の待遇価値がその上限においては同じであったとは言え、下限においては差が存在したことがわかる。

「われら」は最上位待遇価値から對等な待遇価値までを表わし、使用範囲が広い。文末表現の對応も「敬語+ます体」から、「ぢや体」まで様々である。ただ、「我ら」は對等の相手に對して使われる場合においても、高い待遇価値をも表わすという認識が「我ら」の中に潜んでおり、奉公人などの下位階級の人が自分を「我ら」と称しながら對等に話している用例はなかった。[例7]のように、武士階級の人や富裕な町人や知識階層の人が「我ら」を對等に使った。

[例7]我らは今朝他所へ參り、……落馬いたしました。

<岩木忠太兵衛（茶道の師匠） → 伴之丞（侍）> （鐘、320）

一方、「わたし」と「わし」は夫婦や戀人の間で女性が男性に對して自分を称する時、頻繁に使われたという共通点を持ちながら、「わし」「わたし」があるほど同等な待遇価値を表していた。そして稀ではあるが、次の[例8]のように「わたし」「わし」が同じ話し手によって同じ話し相手に共用されている用例はある。

[例8]わしや、嬉しうござんする。わたしが心で、お前一人はどうなる、おいとしや、肌寒から、お顔がたと細つた。

<小女郎（遊女） → 惣七（戀人）> （博、426）

しかし、上の用例は特殊な例（話し手が遊女）で、周知の通り、遊女の言葉と一般町人の言葉の間には相違した点が相当存在した。遊女であるので「わし」と「わたし」の共用が可能であったし、また、話し手が遊女であるので「ござんする」とか「細つた」（通常語+ぢや体）という文末表現も可能であった。一般町人の場合、調査した資料では「わたし」が「通常語+ぢや体」と呼応した用例はない。つまり、このような特殊な場合を除くと、「わたし」

と「わし」は類似しているに見えるが、それぞれ獨自的な領域をもって用いられたことが用例の分析から察せられた。まず、「わたし」は目上の相手や慎みのある對等の相手に對して使われ、下位階級の人々が對等にくだけた話しをする場合、自分を「わたし」と称する用例はなかった。反面、「わし」は下位階級の人々の間で頻繁に用いられた代名詞であった。特に、「わし」は遊女が親しみの客に對してもっとも盛んに使った代名詞であったので、「わし」は「わたし」より上品ではない言葉として一般町人や武士下級の内儀によって認識されたのは容易く推量できる。つまり、「わし」が「わたし」よりくだけた感じを与える言葉であったと思われる。

[例9] **わたし** や子供は、何着いでも、男は世間が大事、……見せて くださんせ。

くおさん (妻) → 治兵衛 (夫) > (天、491)

[例10] **わし** やとうに死ぬるはづなれど、今日まで命ながらへたは、……一度逢わせて くだ
さる。

<夕霧 (遊女) → 伊左衛門 (戀人) > (夕、127)

上の[例9]は「妻→夫」という関係、[例10]は「遊女→戀人」という関係でそれぞれ「わたし」と「わし」が女の人の自称代名詞として使われている。このような使い方が世話浄瑠璃でもっとも一般的な男女間の呼び方であった。

ところで、もう一つ、「わたし」と「わし」の違い点として注目を引くのは、[例10]のような「遊女→戀人」関係では「わし」と文末表現「敬語+ちや体」との呼応が85%ぐらいを占めており、「敬語+ちや体」との呼応が壓倒的に優勢であった。反面、「妻→夫」関係やその他の関係 ([例11]) の場合、「わたし」は文末表現「通常語+ます体」との呼応が70%ぐらいを占めていた。すなわち、次のようにまとめられる。

・「わし」 : 「遊女 → 戀人」

「敬語+ち体」との呼応が約85%。

(總用例220例¹²⁾の中、179例)

・「わたし」: 「妻 → 夫」やその他の関係 (親戚関係、主従関係)

「通常語+ます体」との呼応が約70%。

(總用例457例の中、325例)

[例11] **わたくし** が頼みしこと、**わたし** が……銀才覺して もらひます。

<玉 (中居) → 以春 (お主) > (大、218)

12) この總用例220例とは話し手が遊女である場合の用例数であり、p.5の「わたし」の總用例 (457例) には含まれていない。遊女は本稿の考察対象である町人ではないので別に扱った。

上の[例11]で「わたし」は主従関係で用いられ、「わたくし」と共用されている。「わし」には「わたくし」と共用できるほど高い待遇価値をあらわす用法はなかった。

2-2. 「通常語+ちや体」と呼応するもの

【わし】 【おれ】 【こち、こちと】

「通常語+ちや体」と呼応する自称代名詞としては「わし」「おれ」「こち、こちと」があった。これらは文末呼応が同様とはいえ、待遇価値において同様ではなかった。

まず、「わし」は「通常語+ちや体」と呼応して對等な待遇表現としては使用されたが、目下の相手に對して用いられた用例は見つからなかった。區具体的にいうと、「わし」は上位や對等待遇表現、「こち、こちと」は對等や下位待遇表現¹³⁾、「おれ」は下位や最下位待遇表現¹⁴⁾として使用されており、「おれ」の待遇価値の下限がもっとも低かったことが分かる。次の[例12]は「わし」が親しい相手（共に下女）に對し、對等になれなれしく話している場面で、對等待遇表現として「わし」の代表的な例である。

[例12] わしが鏡で顔を見て……埋れ木ちや。

＜杉（飯炊き下女）→ 万（下女）＞ （鐘、323）

「わし」は目上の相手から親しい對等の相手にまで幅廣く使われた頻度数高い代名詞であった。「わし」の使用範囲が廣かったことは、呼応する文末表現の多様さからも窺われる。つまり、「わし」は「ます体」から「敬語+ちや体」「通常語+ちや体」まで呼応をなしている。「通常語+ちや体」と呼応している用例を察してみると、話し手はすべて下層階級（下女・遊女など）の女の人であった。對等関係においての「わたし」と「わし」を整理してみると次のように纏められる。

- ・「わたし」：上層階級（富裕な町人・武士・知識人など）の女の人が使用。
主に「通常語+ます体」と呼応。
- ・「わし」：下層階級（下女・遊女など）の女の人が使用。
主に「敬語+ちや体」と呼応。

「おれ」は夫婦関係、戀人関係で男が女に、親子関係で親が子にも頻繁に使用された。つまり、對等に近い、そんなに隔たりのない目下の相手に對して廣く用いられたことが窺わ

13) 下位待遇表現とは上下関係を意識したやや低い待遇価値を表す表現をいう。身分差のない、親しい目下の人に用いられる。

14) 最下位待遇表現とは堅苦しい、もっとも低い待遇価値を持つ表現をいう。身分差がある人や心理的に隔たりのある目下の人に用いられる。

れる。しかし、「おれ」はそれだけでなく召使や家臣に対しても使われ、主従関係を表わす用例も多かった。また、「武士言葉として流布したものであろう¹⁵⁾」と言われるが、近世前期の世話浄瑠璃ではすでに町人も自由に用いたのは明らかである。下の[例13]は夫婦関係での「おれ」の用例であり、[例14]は主従関係での「おれ」の用例である。

[例13] そなた故に邪見者と言はせては……改めておれが手から去るはずぢや。
 <半兵衛 (夫) → 千世 (妻) > (宵、613)

[例14] おれはこゝの姉娘、小まんという者、そちは濡れ故……
 <小万 → 源五兵衛 (奉公人) > (薩、99)

「こち・こちと」は用例から見ると、その使用が女性に傾いていた。しかし、男性による使用例は11例でその用例数が少ないとはいえ、存在するので男性もたまには用いたと言える。次の[例16]は女性の使用例で、[例15]は男性の使用例である。

[例15] こちも明日國へ下る。
 <毛剃九石衛門 → 惣七 (仲間) > (博、445)

[例16] なんの、こちやそなたに難儀がかゝるものぞいの。
 <叔母 → 半七 > (長、195) ¹⁶⁾¹⁷⁾

III. 結 論

文末を「敬語+ます体」「通常語+ます体」「敬語+ぢや体」「通常語+ぢや体」と分け、それぞれ呼応している自称代名詞を示すと次の<表1>と<表2>のようになる。

<表1>

	「敬語+ます体」と呼応するもの ¹⁸⁾	「通常語+ます体」と呼応するもの ¹⁹⁾
自称代名詞	わたくし わたし われら	わたくし わたし われら わし

15) 土井忠生、『國語史論攷』、三省堂、1977、p.259

16) 「敬語+ます体」と呼応する自称代名詞は対称代名詞「おまへ」と一緒に使われていた。

17) 「通常語+ます体」と呼応する自称代名詞は対称代名詞「こなた」と一緒に使われていた。

<表2>

	「敬語+ちや体」と呼応するもの ²⁰⁾	「通常語+ちや体」と呼応するもの ²¹⁾
自称 代名詞	われら わたし わし	わし こち、こちと おれ

それぞれの自称代名詞の待遇価値を示すと次のようになる。

<表3>

	わたくし	わたし (主に女性)	われら (主に男性)	わし (主に女性)	こち・ こちと (主に女性)	おれ
最上位 待遇表現	○	○	○			
上位 待遇表現	○	○	○	○		
對等 待遇表現		○	○	○	○	○
下位 待遇表現					○	○
最下位 待遇表現						○

<表3>をみると、下位・最下位待遇価値をあらわす自称代名詞は「こち・こちと」と「おれ」だけであるのに、上位・最上位待遇価値をあらわす自称代名詞は四つもある。しかも、その四つの代名詞の用法や待遇価値などは細かく分けられていた。つまり、近世上方では、目上の人に對して自分をどのように称し、自分をどのように表現するかにもっとも氣を配っていたことが窺われる。

次に、<表3>の分析結果から察せられることは、自称代名詞「わたくし」「おれ」を除い

18) 「敬語+ます体」と呼応する自称代名詞は対称代名詞「おまへ」と一緒に使われていた。

19) 「通常語+ます体」と呼応する自称代名詞は対称代名詞「こなた」と一緒に使われていた。

20) 「敬語+ちや体」と呼応する自称代名詞は対称代名詞「こなた」と一緒に使われていた。

21) 「通常語+ちや体」と呼応する自称代名詞は対称代名詞「そなた」「おぬし」「おのれ」と一緒に使われていた。

22) 「敬語+ちや体」と呼応する自称代名詞は對称代名詞「こなた」と一緒に使われていた。

23) 「通常語+ちや体」と呼応する自称代名詞は對称代名詞「そなた」「おぬし」「おのれ」と一緒に使われていた。

てはすべて性別による使用の制限があったことである。従って、近世前期上方ではどの自称代名詞を選択して使用するかを定めることにおいて、性別がとても重要な基準として働いたことが窺われる。

近世前期にもっとも堅苦しく、高い敬意をあらわす自称代名詞はやはり「わたくし」であった。その「わたくし」と「われら」は共用されたりしながら、最上位待遇表現として人々に認識されていた。しかし、待遇価値の下限においては異なっており、「わたくし」が對等な関係で使用された用例はない反面、「われら」は對等な関係においても使用されていた。もちろん、下級階級の人々ではなく、富裕な町人や師匠などの知識人で代表される上級階級の人々が對等に「われら」を用いた。

「わたし」と「わし」は主に女性によって用いられた共通点を持っていたが、それぞれの独自の使用範囲を持っていた。「わたし」と「わし」の相違点に焦点をおいて整理すると<表4>のようになる。

<表4>

	わたし	わし
主な使用主体	一般町人・武家の内儀など 使用主体は多様	遊女・ 下層階級の女の人
呼応する 主な文末表現	「通常語+ます体」	「敬語+ちや体」 「通常語+ちや体」
文末表現 「通常語+ちや体」との 呼応	呼応しない (話し手が遊女である 場合は除く。)	呼応する
待遇価値の上限	最上位待遇価値 (「わたくし」との 共用例もある。)	上位待遇価値 (「わたくし」との 共用例はない。)
言葉の語感	慎みの語感も備えている	なれなれしい

目下の相手に對する自称代名詞として「こち・こちと」と「おれ」の二つしかない。それも「こち・こちと」はその使用主体が女性に傾いていたので、それを除くと男性は目下の相手に對して「おれ」だけをもって自分を表現したと言える。すなわち、目上の人に對して自分をどう称するかにおいてはいろいろ氣を配っていたが、目下の人に對して自分をどう称するかにおいては比較的單純であったことがわかる。

【参考文献】

本稿で用いる資料は次の通りである。作者、作品名、出版社、刊行年代、作品成立年代、作品の略称の順に示した。

- ・ 近松門左衛門『曾根崎心中』(日本古典文學全集43)、小學館、1703(1989)、(曾)
- ・ _____『冥途の飛脚』(日本古典文學全集44)、小學館、1711(1989)、(冥)
- ・ _____『夕霧阿波鳴渡』(日本古典文學全集44)、小學館、1712(1989)、(夕)
- ・ _____『女殺油地獄』(日本古典文學全集44)、小學館、1721(1989)、(女)
- ・ _____『心中天網島』(日本古典文學全集44)、小學館、1720(1989)、(天)
- ・ _____『心中宵庚申』(日本古典文學全集44)、小學館、1722(1989)、(宵)
- ・ _____『丹波与作待夜の小室節』(日本古典文學全集43)、小學館、1708(1989)、(丹)
- ・ _____『大経師昔暦』(日本古典文學全集44)、小學館、1715(1989)、(大)
- ・ _____『鐘の権三重帽子』(日本古典文學全集44)、小學館、1717(1989)、(鐘)
- ・ _____『博多小女郎波枕』(日本古典文學全集44)、小學館、1718(1989)、(博)
- ・ _____『薩摩歌』(日本古典文學全集43)、小學館、1704(1989)、(薩)
- ・ _____『心中二枚繪草紙』(日本古典文學全集43)、小學館、1706(1989)、(二)
- ・ _____『五十年忌歌念仏』(日本古典文學全集43)、小學館、1707(1989)、(五)
- ・ _____『卯月の潤色』(日本古典文學全集43)、小學館、1706(1989)、(卯)
- ・ _____『心中重井筒』(日本古典文學全集43)、小學館、1707(1989)、(重)
- ・ _____『心中万年草』(日本古典文學全集43)、小學館、1708(1989)、(万)

- ・ 松村明編(1990年)『大辭林』、三省堂. p.1574
- ・ 佐藤喜代治編(1983)『國語學研究事典』明治書院. p.195
- ・ 池上秋彦(1984)「体言の敬語法」『研究資料日本文法9. 敬語法編』明治書院. p.48
- ・ 石坂正藏(1984)「敬語的人称の概念」『論集日本語研究9. 敬語』有精堂. p.50
- ・ 眞下三郎(1959)「近松の作品の地の文と會話文の文法」『講座解釋と文法』明治書院. p.21
- ・ 田中章夫(1973)「近世敬語の概観」『敬語講座4. 近世の敬語』明治書院. p.9
- ・ 吉田澄夫(1953)『近世語と近世文學』東京館出版社. p.42
- ・ 山崎久之(1963)『國語待遇表現体系の研究』武藏野書院. p.108
- ・ 鈴木孝夫(1983)『ことばと文化』岩波書院. p.33
- ・ 湯澤幸吉郎(1982)『徳川時代語の研究』風間書房. p.37
- ・ 辻村敏樹(1994)『敬語の史的研究』東京堂出版. p.317
- ・ _____(1992)『敬語論考』明治書院. p.35

- ・ ロドリゲス著(1995)土井忠生譯『日本大文典』三省堂. p.61
- ・ 小松壽雄(1985)『江戸時代の國語—江戸語—』東京堂出版. p.169
- ・ _____(1983)『近代の敬語Ⅱ』『講座國語史5. 敬語史』大修館書店. p.94
- ・ 坂梨隆三(1982)『近代の文法Ⅱ』『講座國語史4. 文法史』大修館書店. p.105
- ・ _____(1987)『江戸時代の國語—上方語—』東京堂出版. p.51
- ・ 松村明(1977)『近世の國語 —江戸から現代へ—』櫻楓社. p.44
- ・ _____(1985)『近世語の性格』『論集日本語研究14、近世語』有精堂. p.70
- ・ 阿部隆一(1970)『日本語の歴史5. 近代語の流れ』平凡社. p.52
- ・ 土井忠生(1977)『國語史論攷』三省堂. p.259

K C I

要旨

本研究では近世前期の作品である世話浄瑠璃を資料として、近世前期に使われた自称代名詞について考察を行った。

考察の結果、次のような結論が得られたのである。

近世前期にもっとも堅苦しく、高い敬意をあらわす自称代名詞はやはり「わたくし」であった。その「わたくし」と「われら」は共用されたりしながら、最上位待遇表現と人々に認識されていた。しかし、待遇価値の下限においては異なっており、「わたくし」が對等な関係で使用された用例はない反面、「われら」は對等な関係においても使用されていた。もちろん、下級階級の人々ではなく、富裕な町人や師匠などの知識人で代表される上級階級の人々が對等に「われら」を用いた。

一方、「わたし」と「わし」は主に女性によって用いられた共通点を持っていたが、それぞれの獨立的な用法を持っていた。つまり、主な使用主体・呼応する主な文末表現・待遇価値の上限・語感などの側面から察してみると、「わたし」と「わし」は異なっており、そのような相違点を備え、獨立的な領域で發達していた。

目下の相手に對する自称代名詞として「こち・こちと」と「おれ」の二つしかない。それも「こち・こちと」はその使用主体が女性に傾いていたので、それを除くと男性は目下の相手に對して「おれ」だけをもって自分を表現したと言える。すなわち、目上の人に対して自分をどう称するかにおいてはいろいろ氣を配っていたが、目下の人に対して自分をどう称するかにおいては比較的單純であったことがわかる。

近世前期の自称代名詞には性別による使用の制限（「わたし」「わし」「こち・こちと」の主な使用主体は女性、「われら」の主な使用主体は男性）が多かったと言える。従って、近世前期上方ではどの自称代名詞を選択して使用するかを決めることにおいて、性別がとても重要な基準として働いたことが窺われる。

キーワード：自称代名詞、待遇価値、近世語、最上位待遇表現、上位待遇表現
下位待遇表現、最下位待遇表現

투 고 : 2004. 11. 30
1차 심사 : 2004. 12. 11
2차 심사 : 2005. 1. 4

住 所 : 서울 성동구 행당동 한신(휴)아파트 112동 701호

電 話 : 02-2293-0646 016-239-9900

e-mail : zinnser@hanmail.net

K C I